

総合学習・生活科

地域から社会の根本を見つめる目を養うことを目指した授業づくり

荒井 眞一

はじめに

実践報告に先立って、葛保先生より『総合』の授業づくりにおけるアプローチとその成果の検討』と『生活科』の授業づくりにおけるアプローチとその成果の検討』との、本分科会における研究課題がしめされた。

『総合』の授業づくりにおけるアプローチとその成果の検討』に対して求められる事柄は、「教えたいことと学びたいことの統一」「目標設定における知識・技能・情意の統一」「子供にどのような力が付いたかということに対しての検討」の三点である。また、『生活科』の授業づくりにおけるアプローチとその成果の検討』に対して求められる事柄は、「体験によって学ばれたことの、子どもの具体的

な学習成果からの検証」である。

以上のような課題設定の下で目指すべき実践の方向性は、社会の根本を見つめる目を養っていけるような学びの創造である。このような目を養うことを通して、地域という点から、より広い範囲への視野の拡大を図る。このための方法の一つとして、本分科会においては、生産や労働における人々のありようについて具体的にとらえるような実践の方向性を視野に入れていく。

一 実践報告

1 教育課程づくりを経て生まれ変わった

「中頓別探検隊」

中頓別町立中頓別小学校 川村 修司

冒頭の川村報告は、教育課程づくりに対する教員間の議論を踏まえた実践の詳細に関する報告であった。中頓別において名高い砂金と川釣りを起点に、木材やデンブン加工業、さらには酪農へも広がりを持たせた意欲的な取り組みであった。意欲的な取り組みその実践の提示した問題も多岐にわたる物であった。参加者からは、子どもの提言をいかに実践の中で生かしていくか、実践の継続的な発展

を求める声が上がった。また、本分科会の課題でもある、社会構造へのアプローチをいかに図っていくかという点について、暗い方向へと進んでしまいがちな部分をいかにクリアするかという点について、議論がなされた。

薦保先生からは、地域学習の良さをいかに子どもが感じ取るかということに対して意見が出された。この学習を通して事実をつかませていくことによって地域に対する理解を深めていけば、そこから地域の人々の本音の部分も見えてくるのではないかとの提言であった。

2 学びの楽しさ、学びあう楽しさを実感すること

を旨指した「森・土・水」の探究学習

厚岸町立床潭小学校 齋藤 鉄也

齋藤報告は、様々な点で厳しい状況にある、困難な学級での粘り強い実践の経過報告であった。何事に対しても積極的な態度をとらない子どもたちに対して報告者は、「楽しいことには一生懸命に取り組むはずだ」との強い信念の下、子どもたちに森の観察をさせた。この観察を起点として子どもたちは、「なぜ森の土はよく育つのか」という問いに対する考察を進めていった。提示されたワークシートには、多くの感想が記載されていた。

実践において報告者が一貫して目指したことは「とにかく

くわかりやすく楽しんでを！」であった。参加者からは、生活指導から総合学習へと通ずるものとの感想が聞かれた。総合学習の可能性を示唆した点において、非常に意義深い実践といえるだろう。

3 地域の歴史と創作劇

夕張市立夕張滝の上小学校 齋藤 秀昭

齋藤報告は、滝の上小学校において一九七四年以来行われ続けている総合学習と創作劇の歴史的な経緯を踏まえた、実践報告であった。滝の上小学校における総合学習は「畑の学習」「命の学習」「ふるさと学習」の三つを大きな柱とするものであった。

題目にある創作劇は、三つ目の柱である「ふるさと学習」において、「地域の歴史の掘り起こし（聞き取り活動）」を踏まえて行われたものであった。報告者は、創作劇の脚本的な立場としての目標として「子どもが「皮むけること」を挙げていた。報告者と同様に小規模校に勤務する鶴野先生からは、小規模校には小規模ゆえの独自性が存在し、報告に見られたような劇を通して全行的な自覚が芽生えることが指摘され、文化活動の必要性が再認識された。このような活動を通して、心を揺り動かすことの達成感が形成されるというのだろう。

また、滝の上小学校に見られたような教育遺産の継承の意義の大きさについても、参加者から重要性が指摘された。

4 「知的好奇心から探求する学び」への誘い

↳スローエディケーションを意識して

江差町立南が丘小学校 中山 晴生

中山報告は、「五感で感じ、楽しむ。」「表現を楽しむ。ありのまま表現する。」「科学する目を開く。」「知的好奇心がふくらむ。」「探求する学びに取り組む。」「共同する学びにする。」「子どもたちを取り巻く大人の垣をつくる。」といった事柄を、熟成させる時間をとり「探求型の学び」をめざすという方向性の下で行われた実践であった。これら七つの項目は、総合学習の実践において、基本的な方向性をまとめたものといえる。

報告においてしめされた実践は、「五感で感じ、楽しむ」ことにより生活と学びを切り結ぶことを目指したキトビロギョウザ作りと、「科学する目を開く」ことをめざしたオタマジヤクシの観察と詳細なスケッチであった。これら実践を行う中で子どもたちは、課題形成↓原因追究↓解決法の模索↓問題解決↓実践という「学び方」を学んでいった。このように、生活を見つめありのままを書きとめるこ

とから子どもたちは、さらなる知的好奇心を芽生えさせていく。このような子どもたちに対して、「大人の垣をつくる」ことによって、さらなる「探求する学び」に子どもたちは取り組んでいく。このような終わりなき実践の連鎖の行きつくところに、報告者の述べる「スローエディケーション」の成果が現れるのだろうか。

報告者はまた、後述する渡邊実践の本分科会報告に際し、補佐的な役割を果たしている。若手教員との間の「共同する学び」は、教員集団間においても実践されている。

5 地域から学び語り継ぐ過去と未来

東川町立東川第三小学校 駒井 崇

駒井報告は、管内に現存する史跡を訪ね、地域のお年寄りから聞き取りを行う学習に関するものであった。訪ねた史跡のうち、主なものは遊水池、大安殿、中国人墓地などである。

報告者の歴史学習に対する問題意識は、「過去の反省は必要だが、戦争という社会全体の狂気の中でも言葉や民族、立場を超えて温かい人間としての感覚が残されていたことを子どもたちに感じてほしい。世界と共存し、平和な世界を作っていけることを感じるきっかけになってほしいと願ってこの学習を進めたい。」である。実践においては、中

国残留孤児だった方への聞き取りを通して、戦争当時の中国人と日本人の関係の多様さについて考えさせる取り組みを行っていた。これらきめ細かな取り組みが、報告者の意図する認識形成へと子どもたちを導くものとさせていた。

参加者からは、十五年戦争の単元とリンクさせた発展的な学習の方向性が提言されていた。

6 子どもの主体性・能動性を信じて

「国づくり」活動から学んだこと

利尻富士町立鴛泊小学校 藤澤 学

藤澤報告は、鴛泊小学校における実践上の課題を踏まえて行われた、「国づくりプロジェクト」の経過に関するものであった。3年生以上の子ども45名を、「自然・建物チーム」「食べ物チーム」「平和チーム」「スポーツチーム」の4つのチームに分け、それぞれのチームごとおよび全体の会議をもとにそれぞれの計画を立てさせ、子どもたちが「自ラレールを敷いていく」形で「国づくり」を実行させていった。これらの活動を通して、教師も含めた共同的な学習を行い、子どもの主体性や能動性をはぐくむことをねらいとしたものである。

実践の経過は、詳細な授業記録や「国づくり通信」という形でまとめられ客観化されていた。それゆえ、これら活

動が素晴らしい成果を上げていたことが明らかになった。また、実践の一端は動画としても残されており、それらの視聴により参加者に強い印象を与えるものとなった。

結果として、活発な質疑応答が交わされ、予算の問題や安全管理といった細部にわたる部分にまで質問が及ぶこととなった。

共同研究者の前田先生からは、従来の教科との結合性に関して言及がなされた。この実践の成果から、発展的な方向性や教育内容とのかかわりについての見通しについて提言がなされた。

7 総合的な学習「資源・環境・エネルギー」

の取り組み

別海町立上西春別小学校 中村 訓子

中村報告は、「資源・環境・エネルギー」という大テーマの下に行われた実践の経過に関するものであった。このテーマの下で報告者は「豊かな生活、便利な生活と自然を護っていくことは共存できるのか」ということを、子どもたちとともに追求した。実践を行うに際し報告者は、事前学習として「別海町の水産業」「日本のエネルギー事情」「川と森林」に関する授業を、地域の方々による出前授業や数多くの資料を題材として行った。

報告者らの所属するサークルによる綿密な下調べの後、子どもたちは「野付漁協」「バイオガスプラント」「森高農場」「西別川」へのバス見学を行った。それぞれの見学の模様は、子どもたちの作による「バス見学新聞」という形で、詳細に記録されていた。

実践のそれぞれの局面で綿密な下調べがなされた中村実践は、他教科との連携も十分に図られており、本分科会における研究課題を具体化したものとして価値ある実践といえる。

8 自給率100%の米作りの一歩その後

江差町立南が丘小学校 渡邊 洋一

渡邊報告は、江差という地域においてリアリティのある米作りを行うための「田んぼの場所」「米づくりを知っている人」という二つの課題をクリアしながら、地域の人々とのつながりを深めつつ米づくりを実践し、子どもたちの人格形成にかかわる部分にまで及ぶ、認識形成を達成した経過についての報告であった。

米作りにおいて決して有利な条件がそろっているとはいえない江差で、五勝手川沿いの休耕田を地域の方の協力で借り、リアリティのある米作りを行いつつ、子どもたちは共同作業の大切さや生き物を育てる大変さを学んできてい

た。このような学びが達成される過程で、子どもたちは作業に揚力してくれた地域の方と人間的な交流を深めていった。

米づくり計画はさらに、おにぎり計画へと発展し、子どもたちは海水から食塩を取り出す方法を自分たちで調べ実践し「江差の天然塩」を完成させた。

精米を終えた後のまとめの学習で、子どもたちは「私たちのまとめをしたい」と主張した。子どもたちによるまとめの成果は、参観授業において披露され大好評を博した。五年生によるこれらの取り組みは、六年生に進級した後もクラブ活動として継続されている。

中山報告においても述べたが、報告者は教員集団とのかかわりを起点に、「人を掘り起こす実践」を達成したといえる。この渡邊報告からは、ものづくりを介した人間理解の筋道の一端が示されているといえる。

9 教科間の接続をねらいとした

教員養成大学における授業実践

北海道大学専門研究員 荒井 眞一

荒井報告は、二〇〇九年九月に北海道教育大学札幌校において行われた、高性能羊毛布の開発と評価にかんする二ユージーランドとの二国間共同セミナーにおける発表に関

するものであった。報告者はこのセミナーにおいて、第二次大戦後の日本における教育制度の変遷について概略を述べた。

最終報告で残り時間も差し迫っていたため、荒井報告に対する分科会参加者との質疑応答は割愛され、報告のみとなった。

二 総括

ここ数年参加者数は一桁台が続いたものの、今年度は実践報告数が九本となり二桁に迫る数となった。参加者も同様に増加し、分科会における質疑応答にも活気がみなぎっていた。

昨年度から継続して参加された方も複数おり、昨年来の議論の経過を踏まえた有益な議論が交わされた。また、川村・藤澤・渡邊による各報告は若手教員によるもので、各教員の教育にかける熱意のほとばしる素晴らしい報告であった。これら若手教員による報告と中堅・ベテラン教員の報告がバランス良く配置され、見る側にもとても興味深い報告が相次いだ。

ただ一つ悔むべきは、近年にないレポート数であったため、最終での総括討論が行われなかった点である。しかし、

時間配分という技術的な点で反省すべき点はあるものの、これとても一つ一つの報告に対しての質疑応答が活発であったがゆえのことであり、参加者の満足感に水をさすものではない。

(北海道大学)